

浅草活弁祭り

<http://www.katsuben.com/pdf/20130921-23.pdf>

興行の活気 浅草に再び 「活弁祭り」 21日から3日間 2013年9月3日東京新聞

「娯楽の街浅草」復活を目指し、活弁祭りを開く麻生さん親子=台東区浅草で



活動写真が娯楽の王道だった時代を再現しようと、活弁士麻生八咫（あそうやた）さん（61）、子八咫（こやた）さん（27）親子=埼玉県草加市=が二十一日から、台東区の浅草木馬亭で「浅草活弁祭り」を開く。チャプリンの不朽の名作「モダン・タイムス」「街の灯」「サーカス」と、明治、大正、昭和の浅草を描いたジオラマ映画「ゆめまち観音」を上映する。（丹治早智子）

浅草寺西側一帯の「浅草六区」はかつて、都内最大の娯楽街だった。一九〇三年には、日本初の常設映画館が開館。昭和初期の最盛期には劇場や映画館が三十館以上あったという。

初期の映画はほとんどが無声で、日本では人形浄瑠璃や落語などの話芸が発達していたことから、映画のせりふや背景に解説をつける「活動弁士」という職業が生まれた。

麻生さんは一人芝居で全国を回っていたとき、たまたま見た活弁の魅力にとりつかれ、十九歳で活弁士になった。父の公演を見て育った子八咫さんは十歳でデビュー。東京大学大学院の博士課程で活弁を研究しながら、芸を磨いている。

すでに映画がサイレントからトーキーに変わって半世紀以上たつ。作品の数も限られる中、麻生さんは「弁士の力量や音楽によって、無声映画は見るたびに新鮮な作品によみがえる」という。

麻生さんが開くワークショップには、話芸や活弁を通して会話術を磨きたいと入門者が絶えない。視覚障害者を招いた公演も人気で、サイレント映画ファンの輪も広がっている。

浅草六区ではいま、「興行街復活」を目指し、再開発が進む。日本オリジナルの活弁を、映画史ではなく一つの話芸として芸能史に残す研究に取り組む子八咫さんは「活弁祭りを定着させ、興行街としての浅草の歴史をつないでいきたい」と新たな夢に胸を膨らませる。

「チャプリンの名作上映には著作権料がかかるため、全編を上映することはめったにない」と麻生さん。今回親子は、その長編に真っ向から挑む。

二十三日まで、一日一作ずつ昼夜二回公演。前売り二千五百円、当日三千円。問い合わせは、あそう活弁=電048（922）5078=か、公式サイト「麻生やた子やた本舗」へ。